





# 国士館で第1回春まつり

## 2日間で2千人が足運ぶ 太鼓や料理、文化体験も



春祭り開催を祝して乾杯

ブラジル日本文化福祉協会(文協)石川レナト会長は9月25、26日、サンロッケ国士館大ホールで第1回「春祭り」を開催した。「午後の部」と「夜の部」に分かれ、2日間で約2千人が足を運んだ。

25日正午からは開会式典が原沢パビリオンで開かれた。朝方一時降ったが11時頃には晴れ間が広がり、「春祭り」の名に相応しい春らしい陽気を迎えた。

25日正午からは開会式典が原沢パビリオンで開かれた。朝方一時降ったが11時頃には晴れ間が広がり、「春祭り」の名に相応しい春らしい陽気を迎えた。

25日正午からは開会式典が原沢パビリオンで開かれた。朝方一時降ったが11時頃には晴れ間が広がり、「春祭り」の名に相応しい春らしい陽気を迎えた。

25日正午からは開会式典が原沢パビリオンで開かれた。朝方一時降ったが11時頃には晴れ間が広がり、「春祭り」の名に相応しい春らしい陽気を迎えた。

## 日本館が2日から再開館 盆栽100鉢を特別展示

聖市イビラプエラ公園の日本館(栗田クラウジ才道委員長)が10月2日から再開館する。ブラジル日本文化福祉協会が運営する施設で、新型コロナウイルスの自粛要請や修繕工事の関係で約1年半にわたって閉鎖されていた。工事は今年7月から開始され、コロナ禍の影響を受けながらも25日に完成した。



日本館正面の改修工事の様子

料館が昨年行った「アミゴキャンペン」で集められた基金で行われ、椅子や足の悪い人、高齢者も訪問できるようにバリアフリー化された。入り口部分を石畳にし、スロープと手すりを設置。既存トイレの修繕、障害者用トイレとエレベーターの新設。その他、カフェテリア、グッズ販売店、日本館内の池の水をろ過する装置なども新設された。

26日には日本館庭園内の池の壁にデザイナーのミスター・エリカ氏が日本をイメージした絵を描いた。この再開を記念した。

2007年の『美洲華報』時代から今日まで、社会をあげて中国(台湾)コミュニティ全体で行っているブラジルへの社会貢献事業が、年に一度のGRAAC(青少年のがん患者を支援する機関)への寄付だ。

『美洲時報』の代表として「ポジティブな話題を紹介するのが『美洲時報』のポリシーです。社会貢献を第一に考え、良いニュースを伝えるのが社会への責任です」

2017年にリニョール発刊した『美洲時報』の記者はカタリーナさん、人でアシスタントがいるのみ、パンデミック

50年ぶりの祖国で、浦島太郎、聖市 広橋勝造 (11)

「よし！見てろよ。何かのサーファーはボートに突っ込んで、救われたのだ。30メートル沖まで出た。何分間か、あの映画で見た波を求めて沖に漕ぎ出した。波が求めているように、何もない！」

大きな静かになる波は水面ギリギリにいた。急いで鳥肌が立つて恐怖に陥り、まるで太平洋のド真ん中に一人取り残されたかと思う。

## アジア系コミュニティの今(5)

### ブラジル社会への貢献忘れず

台湾編 (8)

ブラジルに慣れるまで最初の1年は辛抱  
「パラグアイの生活は儲かりました。多忙な毎日自分の生活もなく疲れていました。それに比べて、親戚もいるサンパウロで生活は快適でした」

5年間のパラグアイ生活を終り、サンパウロで暮らし始めたカタリーナさん。パラグアイの生活は儲かりました。多忙な毎日自分の生活もなく疲れていました。それに比べて、親戚もいるサンパウロで生活は快適でした。

「私たちはフレイション料理と言えば甘いのが普通。サンパウロ生活に慣れ

「私たちがフレイション料理と言えば甘いのが普通。サンパウロ生活に慣れ

「私たちがフレイション料理と言えば甘いのが普通。サンパウロ生活に慣れ

「私たちがフレイション料理と言えば甘いのが普通。サンパウロ生活に慣れ

「私たちがフレイション料理と言えば甘いのが普通。サンパウロ生活に慣れ

「私たちがフレイション料理と言えば甘いのが普通。サンパウロ生活に慣れ

「私たちがフレイション料理と言えば甘いのが普通。サンパウロ生活に慣れ



ハワイのノースショアでのサーフィン (Stan Shebs, CC BY-SA 3.0, via Wikimedia Commons)



こくさいは にほんじん ようせい  
**国際派日本人養成講座**  
 伊勢雅臣

# シルクロードに降り注ぐ「死の灰」

## 1. 「シルクロードの死神」

ある日本人青年がシルクロードを一人で旅をしてきた時のこと、こんな体験をした。

ローカルバスに乗って南疆をめぐっていたところ、突然曇り空にヒカッと光るものを感じた。その後、バスの中を見渡すと同乗者たちが皆、鼻血を流している。その光景は滑稽にさえ思えた。ところが、鼻に手を当てると自分も同じように血が出てくるのに気がついた。バスの中は騒然となった。あの時、私は被爆したのかも知れない。

## 3. 「豚は彼らの先祖だから 喰わないんだ」

アニワルは1963年シルクロードの東端コムルに生まれ、鉄道局の学校に勤務する父の転居で新疆の中部に位置するウルムチに引越した。そこで育った。当時、鉄道局に雇われているウイグル人はほとんどおらず、同局の運営する幼稚園や小学校で、アニワルは漢人に囲まれて育った。当時は、子供どうしで一緒に遊んでいた。

だが、子供心に傷ついたのは、漢人の大人から蔑まれることだった。小学校2年の時、同級生に家に遊びに行ったら、食卓にはお馳走が並んでいて、一緒に食べようと誘われたとき、豚肉以外のものなら食べないの？と聞いた。

「イスラム教の教えでね」と答えようとするアニワルを遮って、その同級生の父が言った。「豚は彼らの先祖だから喰わないんだ。漢人は自らの先祖を龍だとする。動物を先祖と考えるのは、漢人の独特の民族伝統だろうが、その思考を他民族にも適用してウイグル人の先祖を豚とする。いかにも漢人らしい差別である。」

アニワルは心底傷ついたが、それをバネに「漢人に負けるものか。僕は劣等民族じゃない」と、猛烈に強くなるようになった。

## 2. ウイグル人医師の苦難

このドキュメンタリー番組の制作に協力したウイグル人医師アニワル・トフティのこれまでの人生が、中国に植民地支配されているウイグル人たちの苦難をよく物語っている。

アニワルは難度の高い手術を行い、国際学会にも幾たびか出席するよう優れた外科医だった。しかし中国内の民族差別に耐えかねて、同じテュルク系

## 4. 1949年、中国共産党の軍隊が占領

ウイグル民族が漢人の支配に屈したのは、わずか60年前、第二次大戦後のことだった。現在、独立運動の指導者であるラビニア・カデル女史は、当時のことをこう回想している。

当時、アルタイ(JOG注:新疆北部、モンゴル国境近くの町)ではロシア人は多かったのですが、漢族を見かけることは極々稀で、たまたま漢族がいたら「ヒタイ(中国人)だ」と噂になったもので、山岳地方に住むカザフ族と、麓に住むウイグル族との関係は良好で、互いに密な往來をしていました。アルタイのウイグルの家々は豊かで、私の家など他家に比べたら、豊かとは言えない部類でした。庭には犬を飼い、美しい木々や香りのよい花々が何種類も植えられ、裏の山からは鳥が飛んできて囀っていました。しかし、そんなアルタイの風景が一変したのは、この地が中華人民共和国の統治下に入ったときからです。

1949年、中国共産党の軍隊が「東トルキスタ」を占領し、ウイグル族、カザフ族を問わず、お金持ちの家の人々を逮捕しました。逮捕者は着の身のまま大きなトラックに乗せられ、タリムの砂漠にある労働改造農場や、監獄へ送られていきました。

## 6. あなたがた漢人は 「偉大なる」 民族だ

ある時、ウルムチでバス爆破事故が発生し、多数の死傷者が出た。東トルキスタンの独立を目指す組織が犯行声明を出した。百人を超える医師と看護婦が現場で負傷者の手当に当たった。アニワルもその一人だった。

その時、ある漢人の医師が腹立たしげに叫んだ。「はやくウイグル人は我々と同化するべきだ。そうすればこのような事件は起こらない!」すべての人の視線がその場にいた二人のウイグル人、アニワルに注がれた。アニワルは言い返した。

「確かに、あなたがた漢人は「偉大なる」民族だ。『日本鬼子』(漢族の日本人への蔑称)が中国を侵略したとき、あなた達は8年の抗戦を経て勝利した。我々ウイグル人もいつの日か、それに倣うだろう。」

## 7. 核実験被害の潜入取材

そこに、ウイグル人の知人が「英国のテレビ局の記者がウイグル人医師を捜している」という話をもち込んできた。英人記者に会うと、「新疆に観光客を装って潜入取材し、核実験被害の実態をレポートしたい。ガイド兼通訳と偽って、あなたも一緒に潜ってくれないか」と懇願された。

アニワルは「協力しましょう」と答えたが、もし潜入取材に見つかったら、と思うと、「逮捕」「投獄」「拷問」「禁固20年」などの言葉が頭の中をよぎり、体にガタガタと震えが来た。

98年7月に、アニワルを含む6人の取材チームは新疆に入った。チームの中でアニワルはツリス・トガイドを装っていた。車を借りて交替で運転し、可能な限り裏道を走って、核実験基地のある「ロプノール」近辺の村々を回った。

## 9. 「広島を経験を新疆で活かすことができれば」

今はイギリスで同様に政治亡命してきた大勢のウイグル人とともに狭い家で暮らすアニワルは、新疆での核実験被害について「医師としてやりきれない」と頭を抱えながら、こう語った。

中国では被爆者が団体をすることも抗議デモをすることも許されない。国家から治療費も出ない。中国共産党は「核実験はない」と公言し、被害状況を確認している。海外の医療支援団体は調査にも入れない。医師は病状から「放射能の影響」としか考えられなくとも、カルテには原爆症とは記載できない。学者は大気や水質の汚染調査を行うことを認めて貰えないから、何が起きているのかを告発することもできない。このように新疆では、原爆症患者が30年間放置されたままなのだ。

さらにアニワルは、日本人に向けて、こう語った。

「被爆国日本の皆さんに、特に、この悲惨な新疆の現実を知って欲しい。核実験のたび、日本政府は公式に非難声明を出してくれた。それは新疆の民にとって、本当に頼もしかった。日本から智慧を頂き、広島を経験を新疆で活かすことができればと思っています。私は考えているけれども、共産党政権という厚い壁がある。」(P141)

## 5. 職場での民族差別の壁

1991年にアニワルは鉄道局付属病院の医師となったが、そこでも民族差別の壁に何度も突き当たった。

その場の空気が一瞬にして凍りついた。96年にアニワルは主任医師(管理職)になるための試験を受けた。理論、技術などすべての科目は合格したが、外国語だけは合格点に達しなかった。

## 8. 「お母さん、もう死にたい」

農民たちは「基地では、漢人の住む方向に向かって、つまり西から東に風が吹く時は核実験をしない。基地の西方面では、直接、放射能物質が降り注ぐ。ある村では、生まれてくる赤ちゃんの8割が口唇口蓋裂(上唇や上顎が割れている症状)だった。別の村では、内臓異常のため腹や喉など身体の一部分が大化して痛を持った者がたくさんいた。また先天性異常で大脳発達のため、歩けず話せない障害児ばかり生まれてくる村もあった。」

それでも村人たちは、貧困のために転居もできず、汚染された水を飲み、「死の灰」の降った土壌を耕して生きていかねばならない。

ドキュメンタリー「シルクロードの死神」には、奇病に冒された17歳のウイグル人少女が登場する。生まれた時には問題がなかったが、成長するにつれて骨が自然に折れて変形する間接異常を患っている。腫の骨が飛び出て、その痛さに泣き続ける。痛い。私の足を切ってください。お母さん、もう死にたい。」

## 「平和賞予想に言論擁護組織 気候条約も、国際研究所」

【ロンドン共同】ノーベル平和賞の受賞者予想で知られるノルウェーの国際平和研究所のウイグル所長は29日、来月8日に発表される今年の受賞者の予想を公表し、言明の自由の擁護を目指す国際ジャーナリスト組織「国境なき記者団」(RSF)を筆頭候補に挙げた。地球温暖化の防止を目的とする国連気候変動枠組条約と条約事務局のエスピノーサ事務局長も有力だった。

国境なき記者団については、偽情報社会に蔓延する中、民主主義が機能するには事実に基づく正確な報道が不可欠だと説明。2月に公表した予想を更新し、順位を引き上げた。

一方、近年の気候変動が人々の生活への深刻な脅威となりつつあると指摘し、気候変動枠組条約を候補に追加。ロイター通信活動家グレッタ・トゥンベリさんも受賞の可能性があると専門家の見方を伝えた。

ウイグル氏は他に、ベラルーシ反政権派のチハノ

チベット国民に、突如、中共軍が侵略を始めた  
 C. JOG (124) チベット・ホロコースト  
 50年(下) ヴァライ  
 ラマ法王の祈り アデは27年間、収容所に入れられ、故郷の文化も自然も奪われた  
 【参考文献】  
 1. 水谷尚子「中国を追われたウイグル人―亡命者が語る政治弾圧」★  
 ★ 文春新書、H19

国際派日本人養成講座  
 発行人=伊勢雅臣 (文責)  
 Mail: ise.masaomi@gmail.com  
 Twitter: https://twitter.com/ise\_masaomi  
 無料購読申込・取消: http://blog.jog-net.jp/

「死を待つしかない子供たちに、親は『これは神様の定めた運命なのだ』と説明するしかない」とナレシジョンが入る。

一行は文献資料収集も行った。アニワルが大学や病院、図書館の資料を借り出し、英人記者たちが夜な夜な、ホテルでフィルム撮影を行う。収集した1966年からのデータで、核実験の開始と共にその発生率が年々上昇している事が分かった。取材を終えると、アニワルは逮捕を恐れて、ウルムチに住む家族に電話をせずに、トルコに戻った。放浪した家族は大きな反響を呼んだ。

ようやく外科医の仕事を見つけ、これからは生活も安定すると思っていた矢先に、「中国とトルコが貿易関係の強化を図るので、政治亡命者は身の安全を考えた方がいい」とトルコ駐在の台湾人記者が警告してくれた。

せっかく見つけた外科医の仕事もなげうって、イギリス大使館に駆け込んだ。大使館員は、アニワルが「シルクロードの死神」の制作に協力したと知るが、即座にビザを発給してくれなかった。

北京五輪は国内観客のみ未接種者は21日間隔離  
 (「ジュネーブ共同」) 国際オリンピック委員会(IOC)は29日、来年2月の北京冬季五輪で適用する新型コロナウイルス感染症予防策の基本方針を発表し、観客は中国本土在住者のみ承認することが決まった。海外からの観客受け入れは断念したが、大半の会場が無観客だった今夏の東京大会からは前進した。

「印刷版限定 読者限定」  
 セルをもう!!  
 WhatsApp











